

Title	劇Siegfried成立過程におけるGenevièveの形成
Author(s)	赤木, 富美子
Citation	大阪外国語大学学報. 39 p.1-p.17
Issue Date	1977-03-15
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80658
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

劇 *Siegfried* 成立過程における Geneviève の形成

赤 木 富 美 子

La Formation de Geneviève dans la genèse de *Siegfried*,

Fumiko AKAGI

Siegfried, joué pour la première fois le 3 mai 1928, a marqué la date de naissance d'un grand auteur dramatique, Jean Giraudoux. Cette pièce, une adaptation scénique de son roman *Siegfried ou le Limousin*, fut achevée après un minutieux travail dont on a déjà décrit les différentes étapes.

Dans cette genèse de *Siegfried*, nous avons remarqué une évolution intéressante des personnages féminins. Des personnages épisodiques du roman, deux femmes, Eva et Geneviève, sont deux héroïnes qui rivalisent comme symboles des deux pays, la France et l'Allemagne.

Ensuite nous avons analysé surtout Geneviève en poursuivant le trajet qu'elle a parcouru pour représenter finalement toutes les qualités d'une femme girarducienne et donner le ton à la dernière scène comme un espoir d'entente entre les deux pays à cause de son amour pour "l'Allemand" Siegfried.

第 1 章

Giraudoux が、1922年に発表した自作の小説 *Siegfried ou le Limousin* から、4 幕の劇 *Siegfried* をつくり、1928 年 5 月 3 日、Louis Jouvet によって Comédie-Française で初演された時まで、誰も彼を優れた劇作家であると予見できたものはなかった。「Giraudoux の流儀は、劇形式に調和しうとは思えない。」⁽¹⁾ ものだったのである。劇作品とは、何よりも、「それぞれ異なる登場人物と筋」⁽²⁾ が必要であるのに、Giraudoux の小説は、「人物がなく、筋もない」⁽³⁾ と云ってよい変った小説である。彼は1923年、*Simon le Pathétique* に手を入れた時、原文を少しもかえず、章の順序を入れかえ、ある女主人公に関する事柄を、他の全く別な女主人公のものにしてしまったという資料さえ研究されている。⁽⁴⁾ 最も劇作品になりにくい小説から、Giraudoux がどのようにして、1つの劇を、しかも劇作家としての輝かしい道を彼に開いた劇を、つくっていったかは、興味ある問題である。*Siegfried* が、Giraudoux の小説のうち、劇に変化した唯一の作品であるだけに一そう興味深いものを含んでいるといえるだろう。いかに唐突にみえようとも、作家にはこの作品を劇形式にして、しかも上演まで注意深く見守るだけの理由はあったわけで、Giraudoux は、問に対してその動機を明確に答えている。第一は、彼が小説 *Siegfried ou le Limousin* に表現したのは、ドイツとフランスの関係だったのであり、この問題は彼にとって対話の形で、非常にくっきりした対立の形で現われてきていたが、それは劇という形式を要求するものであったこと。次に独仏両国の問題は、「世界で唯一の重要問題」であったから、舞台でしか表わせない広さと響きをもって扱うべきだと考えられたことであるという。⁽⁵⁾

最初 Giraudoux は、これを映画にする予定で、主演は Charles Boyer とまで考えられていたそうである。しかし小説が Louis Jouvet に提示され、彼や友人たちの助言によって、Giraudoux はそこから1つの劇をつくりだす仕事にとりかかった。劇が上演されると、殆んどの評判家が讃辞を送り、もっとも酷しいものも、「対話の幻惑的な巧みに敬意を表し、偉大な劇作家の誕生に脱帽した。」⁽⁶⁾

勿論 Giraudoux は、信じられているようにいともたやすく小説から劇をつくりあげたのではない。細かい点のために何度も場面全体をかき直し、多くの変遷を経て、決定的な形ができた。この様々な段階は、Albérès の研究によって明らかになっているが、⁽⁷⁾ まだ発表されない原稿もあるので、技術的な面からの劇作家 Giraudoux の研究は、今私のしようとする事ではない。しかしこの夏、小説から劇になった第一段階の *Siegfried von Kleist* という作品と、その他の書き直し断片を、自分の目で読んでみて、私は Giraudoux 劇の女性という観点から面白い変化に気づいたので、それを調べてみたいと考えたのである。⁽⁸⁾

小説では主役ではなかった1人の女性 Geneviève が劇では *Siegfried* の恋人として重要な役に発展していること。これは誰の目にも明らかなことで云うまでもない。だがこの女性を充分に劇で表現するまでの各段階には、小説から劇になることによって変ってくる女性の役割についての考察や、小説では表現されていないのに思いがけず劇においてよく現われたところ、ま

た劇化によって女性の表現のなかから失われたもの、そしてこれらすべての変身を通して、徐々に浮び上ってくる女性についての重要な観念、などがおしよせる波のように問題化してくるのが感じられた。今私はこれらの問題を、小説 *Siegfried ou le Limousin* — 劇 *Siegfried von Kleist* — 上演された形での劇 *Siegfried* と各階階を追って比較し、その他の書き直し断片も参照しながら分析してみようとする。

まず大体の骨組であるが、小説の方は、批評家のいうとおり、種々の話が並んでいて、きわ立った主役もないといってよい。しかし中心には劇と同じ筋を辿ることはできる。曾てドイツに学んだ「私」が、巨大な戦争の間に前戦で行方不明になった幼友だち、Forestier を求めて再びドイツに行く。実は Forestier は、記憶喪失のまゝドイツ軍に救われ、Siegfried という名でドイツ人たちの人気を一身に集めるドイツの指導者であり、自分がフランス人であることさえ知らない。これらの消息を斉してくれたのは、「私」の留学中の親友だったドイツ人であり、詩とロマンの国として「私」が愛するドイツ人らしいドイツ人の Zelten なのだが、彼は今、ドイツを龐大な株式会社にしてしまおうとする Siegfried とその友人たちに反対して、空想的な変革を夢みている。彼をたよってミュンヘンにきた「私」は、思い出のわき出るまゝ、敗戦の国ドイツの印象を小説のあらゆる場所にちりばめる。「子供を殺された母親のすべてが死んだ時、平和はその1歩をふみ出すだろう。」(P.476) という考察や、ドイツ人のフランスに対する憎しみも描写されているが、特に Zelten の妻であったフランスの女性 Geneviève と、Siegfried を助け見守ってきたドイツ娘 Eva とを比較するなど、あらゆる機会と材料をとらえてドイツとフランスの対照が行なわれている。さて「私」は、Siegfried の記憶の回復を希って、フランス語の個人教授にことよせてさまざまな工夫をするが、彼をドイツから奪われまいとする反対勢力も大きかった。やがて Zelten は、革命に失敗して国を追われる。追放の命令をもってきた Siegfried に Zelten は、何の資格で君はその命令を伝えるのか。と質問、Siegfried が「ドイツの代表として」と答えると彼は、君にその資格はない。「Kleist君はドイツ人ではない」と暴露する。(P.523) Siegfried は別荘に身をかくす。後を追った「私」は、世界各国のニュースをよませつゝ祖国を探し求めている Siegfried を見出す。「私」は彼がフランス人であることを告げようとするが、逆に Geneviève が病院で死にかかっていると報らされる。結局彼が祖国を知るのは、死の床の Geneviève の枕許であった。Geneviève は Siegfried がフランス人であったことを彼のために喜び、フランスに帰って自分の遺産を受取るよう云い残して異国に死ぬ(P.530)。小説の最後は、眠っている Siegfried と、彼がやがて目覚めた時、その名を記した幼時の写真を示そうとしている「私」とを乗せて、ドイツからフランスへ汽車が国境をこえてゆくところで終わっている。

私はすでに大分劇に近ずけて小説を解説したが、この小説から Giraudoux 独特の「disparate」なところを除いて要点をとりあげてみると、a) 物語りのはじまり b) Siegfried の経歴 c) 彼に事実を知らせるためのフランス語の個人教授 d) Zelten の革命と失敗 e) Zelten の暴露 f) 祖国を探し求める Siegfried の悩み g) Siegfried への啓示。

h) 結末 となっており、これらはすべて、小説 *Siegfried ou le Limousin*、劇化第一作 *Siegfried von Kleist* 上演された決定稿 *Siegfried* の全作品を通じて存在する要素である。これらの要素が、どの人物によって実現されるかがポイントになると思われる。

a) について。小説では、Forestier の文章をドイツ人 Siegfried が盗作しているらしいことに気づいた「私」が、Zelten とパリでめぐり会ってドイツへ出かけるところから始まる。劇 *Siegfried von Kleist* (以下 *S.V.K* と略す) では、「私」を登場人物化した Robineau が Zelten からの要請で、Forestier (今は Siegfried) の恋人であった Geneviève を伴ってドイツの町 Gotha へ致着したところから始まっている。劇 *Siegfried* では、不思議な過去をもったドイツの指導者 Siegfried が両親を探していて、看護婦であり秘書でもある Eva がその努力を扶けているところへ、Zelten のよんだ Robineau と Geneviève が到着する。小説では、「私」の心の動きを中心にして物語が始まってゆくのに対して、劇では2作とも女性が(前者では Geneviève 後者では Eva が) 始まりを支配していることがわかる。

b) d) e) — Siegfried 出現までの経過と Zelten の件は、三作ともほぼ等しく、小説は Zelten が大きく扱われ、*S.V.K* でもなお重要な場面を占めているが、*Siegfried* では殆んど傍役になっている点が異なる。Siegfried を Forestier に戻すためのフランス語の授業は、小説では「私」の役であるが、劇では2作とも Geneviève に振替えられている。

f) g) — Siegfried の祖国探しの場面は小説では秘書の青年を相手に行われているが、劇では2作とも Eva を相手に詰問する。ただその事実を知らせる役は、*S.V.K.* では Eva, *Siegfried* では Geneviève と変化している。

h) — 結末は後に見るように3作とも大変異なり、*S.V.K.* では Siegfried の記憶がもどって Geneviève の腕のなかで死ぬことになっており、小説と劇 *Siegfried* とは等しいが、どちらも *Siegfried* は記憶喪失のまゝ(小説では「私」と共に、劇 *Siegfried* では Geneviève と共に) フランスに帰ってゆくことになる。

これらの主要素における変化を見ただけでも、劇化にともない、女性がずい分大きな役割を果たすようになったことは明らかである。特に Geneviève は、小説での Zelten の別れた妻という端役から、Siegfried の恋人として女主人公に発展、最終的には Siegfried 以上の重要な問題を含む役になっていると私には思われる。そこで第二章では、Geneviève とはどんな女性なのか、一体どんな問題を提示しているのか、劇が最終的な変化を蒙ることによって、Geneviève はどんな役割を果たすことになったのか、を見てゆくのであるが、その前に、同じく女性として劇で主要な役を占める Eva の変化を明確にしておきたい。この女性は Geneviève の対立概念を示しており、その変化は Geneviève の変化に大きな関わりをもつからである。

Eva は、記憶を失って発見された Forestier を救い、彼にドイツ語を最初から教え、Siegfried という名を与え、彼の明晰な頭脳の中に祖国ドイツの救い主を見出して彼を愛した女性

である。彼女は、Siegfried がドイツ人でないことを見破っている Zelten の謀みを恐れ、妨げ、Siegfried がドイツを棄てることに反対して最後まで闘って破れる女性である。いわば彼女はドイツそのものの代表であり、小説でも劇でも従兄の Zelten に恋されている。彼女はどこでもフランス女 Geneviève と対比され、互の特徴を際立たせる。小説では、「私」が敬愛していた老博士 Schmanhofer の娘として描かれ、Siegfried をフランスへつれ戻そうという「私」の試みは、1つには Eva との戦いとして意識されている。初対面から Eva は私に敵意を示し、「私」も「この強情な人物のなかに、好々爺だった Schmanhofer 氏の娘を認めるのに苦労した」(P.443) と反感を示している。Eva はまたフランスを憎んでおり、「フランス人は地球上で最も卑しい、最も残酷な国民だ」と云う。「最も悪徳に染った国民、サドの国ラクロの国である」(P.476) 彼女は金髪で青い目の均整のとれた美人であり、信念の女性であり、規則と道徳の中に安住し強い意志で生きぬく女性である。小説では、凡てが「私」の目を通してあるので、Eva の描写も詳しく、フランス女 Geneviève と対称して描き出されている。Geneviève がすぐ動物たちと仲よくなるのに反し、Eva はその色が自分の服の色と同じだからといって動物をよぶ。「だが白い狢犬は彼女の白服を逃れ、ひわは彼女の黄色い服をさけた」(P.501) 「私は Siegfried の好意が2人の女性の間にゆれ動くのを感じた。彼はそれとも知らず、ある苦悩をもって2つの国の間にためらう自分に驚いていた。それほど2人の女性はそれぞれの国の娘だったのである。ドイツの娘は、巨人や超人に思を馳せ、フランス娘は、自分と同じような人間に心魅かれる。想像上の偉人がドイツで崇められ、現実の生きた偉人たちは、避難場所のようにフランスに憧れ、国家としての魂がないと云われるこの国で、しばしば人間らしいその生を終ろうとするのは何故だろう」(P.501-2) 休暇に出かけた小さな町でさえ、「Geneviève は、入江とカジノのサロンが、太陽の光とエナメルで彼女を真珠のように生み出すような、正確にそういう場所にいつも座るのに対して、Eva は必ず、市当局が、噴水や銅像を立てるような場所に座った」(P.501) このドイツとフランスの対立は、また「私」と Eva との争いとしても現わされているから、Eva の占める場面は、小説では相当大きいと云ってよい。

初めて小説を劇化した最初の作品、S.V.K. では、小説の名残をとどめて、Eva の占める場面は劇 Siegfried でよりもずっと多く、それだけにより多くのニュアンスを与えられているし、劇化に伴って、その悲劇的な役割から、小説にはなかった重さも加わっている。例えば S.V.K. の2幕2場には、Siegfried のもとの恋人らしいフランス女の出現を心配した Eva が、彼女と共に彼を見守ってきた医師 Schmeck 教授を電報でよびよせるところがある。彼女はフランス語の授業をこの女にさせるべきかどうかを迷い、Siegfried が過去を求めて苦しんでいること、痩せたことを医師に告げる。Eva は Siegfried が心からドイツを愛しているのかわろ心配するが、Schmeck 教授は、ドイツに仕えるのにドイツを愛する必要はない、と Eva を励まし、Siegfried の記憶を回復してフランスへつれ戻ろうとする企てに対してとるべき一切の措置を話す。これは劇の手法上、Exposéを果す場面であるが、Siegfried の身を案ず

る Eva の描写があるために、Eva は深みを与えられ、印象が強くなっている。また 1 幕 5 場では、Eva や友人たちが、Siegfried の 7 回目の誕生日を祝ったのがきっかけで、Siegfried の心に過去のない苦しみと呼びさまされ、それを Eva に訴える場面がある。この場面は、音楽になぞらえて題された原稿の 1 つ、*Fugues sur Siegfried*⁽⁹⁾ の中にも、Lamento として描かれているが、Siegfried を慰め励ますことによって、Eva の、ドイツと Siegfried への愛がよく表現されている。更に 3 幕 6 場では、Zelten からドイツ人でないと云われた Siegfried が Eva を語り、自分が何処の国の人間なのか探り出そうとして、世界各国のニュースを彼女に読ませる場面がある。「君は憐れみを感じてくれるに違いないよ Eva。君は云わないよう命令を受けている。それはわかっている。だが君は僕を愛している。君の声、君の様子が君を裏切って僕に教えてくれるに違いない」Eva は、順々にニュースを読みあげていくが、或国のニュースをとばす。咎められて E —「滑稽なニュースをとばしたのよ、象をのせた列車が駅で衝突したんですわ」S —「では僕は鉄道事故や野性動物に熱中する国の国民なのだ。だったら僕にはそれが大ニュースなのだ。どこの駅？」彼は入って来た士官に Brive という駅はどこの国かとき、フランスという答を得る。（Eva に向って）「私の名は？」「Jacques,」「Jacques Forestier だね？ 多分」「そうです」

Siegfried が記憶喪失の闇のなかから、初めて自分の国と自分の名を知る重要な場面に Eva が相手役だということ、これは Eva に大きな比重がかけられていたことを示すし、小説から劇へ移行したはじめは、「私」の重要な役割の 1 つを Eva が担っていたことを示す。更に現在残っている断片の 1 つ、3 幕 2 場の習作⁽¹⁰⁾ には、Eva の美しい台詞がある。革命に失敗した Zelten の暴露を怖れた Eva が、Zelten に会おうとする Siegfried を、とめる場面である。「私たち 2 人の間で初めて、いつも与える役だった私が頼むのよ、おねがいです。Zelten に会わないで！ 7 年前、嵐に会ったことのなかったあなたに、嵐には用心しなくてはいけないこと、余り高い木の下へ行行ってはいけないことを教えた時のように、何もきかないで私の云うとおりにして！ 私は今でも嵐を予見する力を持っています。近づく嵐をさけましょう。」

これらの場面は Eva に、敗れた祖国を愛し、その救い主 Siegfried を育て愛した女性、彼をフランスへ引き戻そうとする Zelten や、フランス人の恋人や友人や、そして Siegfried 自身の内部の力に対して、絶望的な戦を続ける悲劇の女性としての陰影を与えている。もしこれらの場面が残されていたら、それは Eva に細やかな、いくらか弱々しい女性の印象をつけ加えたかも知れないものであった。しかし Eva の本質は、大きく、力強く、均整のとれた彫刻のような美しさにあり、この後の改作は、すべて Eva を単純化し、彼女のこの面を強調するように方向づけられたと思われる。Geneviève においては、すべてが問いかけなのに対して、Eva は感歎符なのだとして Siegfried 自身が評している（劇 *Siegfried* II 5）。決定稿 *Siegfried* でつけ加えられた第 1 幕第 1 場は、最初から Eva を有能な秘書兼看護婦として充分に表現している。彼女は Siegfried に面会を求める将軍たちの会見の時間を決め、取次役のおしゃべりにも「誰がお前に意見を云いなさいといって？」とびし

やり口を封じるなど、断固とした役柄に描写されている。終幕に近い3幕5場の山場では、Siegfried を間にして、フランスを代表する Geneviève に向って、ドイツを代表して彼をひきとめるための滔々たる弁論をくり広げる。しかしこれも、Geneviève の沈黙と、人間的な小さな事実という力の前に、その力を際立たせるための空しい義務論と英雄論を展開する役でしかない。劇 *Siegfried* で Eva にかき加えられた部分はみな感歎符 Eva を、偉大な英雄的な、大げさなドイツ娘 Eva を強調するものばかりである。そして Eva に陰影と悲劇的感動をつけ加えた筈の、習作の断片や *S.V.K.* の各場面は省かれ、*Siegfried* にその国の名を知らせる重要な場面は、全部 Geneviève に移されたのだった。

第 2 章

さて、Geneviève を分析する前に、理解を容易にするため、ここに *S.V.K.* と *Siegfried* の対比を簡単な表にしておこう。

<i>Siegfried von Kleist</i>	<i>Siegfried</i>
I - 1 Gotha を望む宿の一室 Geneviève Robineau G は夜中に突然よばれて Robineau にドイツへつれてこられ、宿舎に着いたところ	I - 1 Siegfried の住居の待合室 Eva Muck (取次役) 下僕 Eva は Siegfried のために重要会議を断り、親探しの準備をととのえている
2 Zelten Muck Johan 2 人を呼びよせたのは Zelten の謀みだったことがわかる。	2 Eva Zelten Muck Z と E の口論、Z が Siegfried に反対の意志を示す
3 Zelten Eva 女性より男性よりも長生きするという Zelten の女性論。	3 Zelten Muck M が Z のスパイとわかる。Z は、明日の午後何かが起ると予告。
4 Z. E. Muck , 親たち, Siegfried 子供を探している親たちとの無言の面会の場、S の両親は見つからない。	4 Muck , 親たち。 親たちの様々な描写、全部右のサロンへ入ってしまう。
5 Eva Siegfried Muck Siegfried のなげきの場	5 Geneviève Robineau 同じ広間へバリから到着したところ。行方不明の恋人 Forestier の話。
6 Zelten Robineau Muck 将軍 2 人通過 Z と R の再会。Z は Geneviève を Siegfried に会わせる意図を語る。	6 Zelten Robineau 左とほぼ同じ。
7 Zelten Geneviève Robineau G の驚き、Siegfried は Forestier であったことがわかる。	7 同じ
8 Siegfried G. R. Eva 事実を知らぬ S は G にフランス語のレッスンを依頼する。	8 同じ

II - 1 Muck Fontgeloy Schmeck 2 人の泥棒、笑劇の場。	II - 1 Sjefrid の居間 Geneviève Robineau G は広間とバリの Forestier の部屋との 対照におどろくが Forestier の好んでい た肖像画を見つけて希望をもつ。
2 Schmeck Eva Eva が心配をうちあける場面。	2 Geneviève Siegfried G は S の身の上話をきき Forestier のド イツ観も物語る。写真を見せようとした 時事件がおこって S 去る。
3 Geneviève Robineau Siegfried と Forestier の部屋、好みの 比較、同じ肖像画を見つける。	
4 Geneviève Siegfried 右の 2 場によく似ている。	
5 Geneviève Fontgeloy 2 世紀半前、フランスを追われたユグノーの子孫である将軍との対話、 終に大砲の音が聞え異変が起ったらしい様子。	3 同じ
6 G. F. 将軍 2 人、Eva 革命と Zelten が権力を握った事情が齎される。	4 G. F. Eva
7 Geneviève Siegfried 脱出前に G に会いに立戻った S はただ 1 つ記憶に残る言葉 ravissant を 告げることで愛を告白する。	5 同じ
III - 1 王座のある広間 Muck, Gertrude Eilers, 労働者、引越手 伝人 王になった Zelten にパリから電報が来 ている挿話など小説と同じ。	III - 1 1 幕と同じ Siegfried の住居 Muck 取次人、後 Zelten Zelten の革命は失敗し、Siegfried が 人々の寵児になったことが話される。 追放の身で Zelten が現われ Geneviève を呼ばせる。
2 Muck Zelten	2 Zelten Siegfried Eva 2 人の将軍 追放命令を伝える S に Z はドイツ人でな いことを暴露する。
3 M. Z. Robineau Zelten のドイツ論	3 Siegfried Eva S は Eva を詰問するが Eva は知らな いと云ったまま去る。
4 M. Z. R. ユダヤ人の死刑囚 笑劇的場面 5 右の 2 場と同じ	
6 Siegfried Eva 士官 S は祖国を探り出すため Eva に各国の ニュースをよませ、遂に自分の名と国を 知る。	4 Geneviève Siegfried G はドイツに止まる決心を話すが S はド イツを失った悲しみを語る、G は見かね て S がフランス人 Forestier であることを 明かしてしまう。
7 Geneviève Siegfried その他 G はドイツに止まる決心を話す。S は自 分の恋人だったとわかった G を見ても、 何も思い出せないと打ちあけ G は失神す る。	5 Geneviève Eva Siegfried Eva はドイツ人としての栄光を、G は フランスでの幸福を説くが、S は決断す ることが出来ないまま幕。

同じような場面でも、台詞が洗練されていたり、簡潔になったりしている違いまでは、紙数の都合で記載することができないので、大体の内容の比較にとどめた。これらの改作の大部分は、集中化という劇の重要な手法のための書きかえであるが、しかしそのために *Geneviève* の受けた変化や、それにも拘らず、残され強調された部分によって、*Geneviève* がいかに形づくられていったかがこの章のテーマである。

1) *Fille naturelle*

Geneviève とは一体どんな女性なのか。まず小説での描写からそれを拾いだしてみよう。その特徴の第一は、*fille naturelle* という言葉で現わすことができるだろう。彼女は *Eva* とちがって、あらゆる正当なもの—人間の定めた法律、道徳、義務といった概念の—反対物である。「私たちは彼女を熱愛していた。何故なら彼女は、世界がいやいや生み出し、文明が彼女を下らない凡ゆる不遇でおしつぶすことによって復讐しようとする、自然の強さ、または弱さの1つだったからである。何故なら彼女は不倫の子であり不倫の母であり離婚しており修道院脱出者であり、その他もろもろのものだったからである。彼女は社会に向って子供らしい言葉で自分を辨護したが、その言葉は、ケチな良心に仄しいところがなく法に叶っていると思っている人々を赤面させた。『私は不義の子だけど父は上院議員でした。私は修道院を出てまっすぐ *Quintin* のアトリエに來たけど夏だけしか神様を信じないの。私は離婚したけど続いて夫と暮しています。私は戦争中ドイツ人だったけど2度フランスに來て死児を産みました』など……」(P.417) だが *fille naturelle* という言葉には、私生児という他に自然の娘という意味もある。彼女はどんな事件も予見することができず1914年7月29日に低地ドイツ人と結婚している。つまりジャンヌ・ダルクの処刑の前夜、きつとイギリス人と結婚したにちがいないような女性である。けれども自然の要素や、魂にだけ関わるものは、何でも見透すことができ、八百屋のおばさんや、門番のおばさんの中にも、人間そのものの寛大さや救いや不幸を見抜くことができた。彼女の唯一の希いは、1人で住まないことであり、恋人に捨てられると、又次の相手をみつけ、18ヶ月毎にちがう恋人と暮していた。

彼女は彫刻家である。*le Figaro* 紙がロダン以来の天才とほめても、彼女の一番の楽しみは、胸像の眼に編み棒で穴をあけることなのだ。*Eva* にはよりつかなかった動物や小鳥が彼女にはみんななついた。15ヶ国の世界各国に対する礼儀さえもわきまえた *Eva* が、自然の風景を前にすると、何かしら不自然さときどちなさを感じているのに、*Geneviève* は新しい異国の風景の中で第一言葉もわからない人々の間でも楽々としている。「*Eva* は、*Geneviève* がその単純さで満たしている風景と海をそこから免れさせようとして、様々の歴史を物語る。だが、*Geneviève* が魚釣りをしたり、クロケット遊びをしたりするだけで、島は突然その歴史から純化され、ミノートルの祭の翌日に、カンデイの娘たちにだけ許されるような休息を我々に与えてくれるのだった」(P.500) こうした素朴な自然にもとずいた人間と人間との触れ合いこそ、フランス的と名づけられるものなのだろう。それこそ「パリの東駅に一番近いレストランで、チェコや英国の大亡

命者と、その給仕をした地方出のギャルソンとの間に、変らぬ友情が芽ばえる早さの原因』(P.501) なのだろう。ともあれ Geneviève は、法律や道徳や身分をこえて人間の問題を見ぬき、不幸に手をさしのべることのできる女である。彼女は死の床にしながら、自分がドイツ人でないと知って苦しんでいる Siegfried のことを余り気にやむので、「私」はとうとう彼が何国人なのかを告げ報らせる破目になる。彼女は Siegfried がフランス人であったことを喜ぶ。「彼が他の外国の町の生れだったら同じような好意を覚えなかったというのではなく、たゞフランス人であることほど、きちんとした生活や法則に適する状態はないと思われたからである」(P.528) 彼女は自分が私生児であることで卑屈になったことはなかったが、きちんとしたものに憧れを抱いていたのだった。Geneviève は、何一つ持たずにフランスに帰っていく Siegfried に、36才の自分の生涯から残ったものを遺贈する。「時々は Solignac の私の家に住んでくれるよう、また私自身の一部を相続してくれるよう」依頼する。「こんな風にして彼女は、自分と共に滅びゆくべきものと、Siegfried の新しい過去の中に植えられるべきものとをわけることに、その宵を過した」(ibid)。小説はこの後、「私」と Siegfried がフランスへ向う汽車の中で終るのだから、小説における Geneviève が、いかに端役とはいえ、深い印象を与えるということが理解できる。この「小さな弱々しい」(P.416) フランス女は、フランスのよいものを一身に現わしており、祖国に帰っていく Siegfried の中で生きつづけてゆくべきフランス的要素を示しているのである。彼女が fille naturelle であり、規則外存在であるということは、具体的な個々の人間という立場を最も重視しようというフランス的思考と考え合わせて、重要な意味をもつと思われる。作家と作品をあれほどきっぱりと分けた Giraudoux⁽¹¹⁾ に対して作者の意図を問うのは愚かしいことだから云わないとして、少なくとも作品が劇にかわった後にも、もっとも強く残されたのは、この要素であったことは確である。しかもおぼろにしか表現されていないこの要素は、劇の第一作、第二作と稿を重ねるにつれて明確な意味を持ち、その場所を拡大してゆく。

Siegfried ou le Limousin から、劇化の習作らしい断片の1つ⁽¹²⁾ が生まれた時、その1幕1場は、Zelten の依頼に応じた Robineau と、彼に連れ出された Geneviève が Gotha の町の宿についたところから始まっている。おそらく S.V.K. よりも前の原稿らしく思われるこの作品でも、すでに Geneviève は Zelten の妻でなく、Siegfried の元の恋人という役にかわっているが、彼女の自由な、偏見にとらわれない性格はそのまま描き出されている。今どこにいるか当ててごらんと云われて、Geneviève は自分は幼い時から当てものがわからないといつも玉子と答えたのだと無邪気に話す。G-「どうして私を連れ出したの？ 愛しているから？」R-「いやそうじゃない」G-「でも一緒に住むのでしょうか？」-「何故いけな？」G-「そうね。ぢゃいゝわ。それで充分。私の希みは愛することじゃなくて、1人で暮さないことなの」そして彼女が身寄りのない孤独な女性で、夜隣の人が無意識に大きな溜息をつくのをきくのがどんなに好きかを語る。「それは現実の苦しみに私が溜息するのを免れさせてくれるし、木の中の風のように誰か人間の中に生活の凡ゆる音をきくのがどんなにいゝか！ おねがい、私が眠りこむまで音

をたてゝいてね」 この断片と、*S.V.K.* を比べてみると、*S.V.K.* では、玉子の話は省略されたし、Robineau に「愛しているから？」と訊く部分も省略されている。これは Geneviève の描写を余り細かくして特異な存在にすることをさけるという効果を齎したし、Robineau と Geneviève の友情を余り強調しないことによって Geneviève の Siegfried への愛を純粹なものにするという結果をつくり出している。上演された劇 *Siegfried* の第1幕は Eva から初まり、Geneviève の登場は5場であるが、Geneviève の身に関わる大事だという Zelten の電報で Robineau に連れ出された事情は同じで、身寄りのないことも語られる。しかしこゝでは、夜となり人に人の気配がするのが喜びだという台詞すら省略され、「この世で私に関わりのあることなんて何もない。Jacques の死以来、Jacques の行方不明以来なんでも…」という言葉が増加している。これは Geneviève が小説でのような独立した個性から、徐々にある役割へ向って集中化していくことを示す曲線だといってよいと思われる。Geneviève は、非常につよい Siegfried への一本の線におかれて劇の中を歩みは始めている。しかし彼女が、抽象的な栄光や、人間のきめた義務でなく、日常生活の人間的なかかわりの中に、自然の中に生きる女性であり、それを子供らしい言葉で表現するという特徴は、劇 *Siegfried* にだけある Eva との対決の場で、遺憾なく発揮される。E—「私たちは偉大な場面にいるのに貴女はそれを卑しくしているわ」 G—「氏素妊もわからないあわれな犬が、どうして今フランスを代表する値打ちがあるように思えるのかわからないわ、ごめんなさい。でも私はこんな争論をしたことがないから、他に Jacques に云うことがないの…… 犬だけが Jacques を待っているのぢゃない。あんたのランプも、郵便箱の頭文字も、あんたの街路樹も…… 人々以外の凡てがフランスではあんたを待っている。こゝでは人々以外は何もあんたを知らない。何もあんたを見ぬけない」(Ⅲ-5)

2) Femme

今まで Geneviève が小説でも劇でも1つの具体的な過去をもった、つまり個性をもった存在として描写されるのを見てきたが、こゝで私たちは抽象的な問題に遭遇する。小説では Siegfried = Forestier の親友であった「私」という男性に、すべての重要な場面が委ねられていたのに、それが殆んど Geneviève に移されたということ、これは劇になって上演された場合、何よりも、重要な役割が女性に委託されたということなのである。小説という、意識に展開する文字の世界では、男性か女性かという区別は一番先にとびこんでくる問題ではない。考えてみれば、奇妙なことなのだが、現実の世界では、その服装によって、その声によって、その姿によって、この区別が、まず目に入ってくるのである。劇の世界も同様である。登場人物の国籍は、時に不明な場合もある。だがそれが男性か女性かは、つねに区別される。Geneviève は何よりも女性として舞台に現われなければならないというこの事実によって、Geneviève を Geneviève たるしめる個人的過去とその好み以上に、抽象的な女性という観念によってかたどられることになる。Siegfried に関する3つの作品と断片では、女性という観念がどんな風に Geneviève を形づくってゆくかを見てみよう。まず小説で一般論として女性が論じられていて面白い指摘があ

る。親友をフランスへつれ戻ろうと決心している「私」に対して様々の妨害が起るが、その1つに Eva との争論があった。その時「私」は、相手が女だからといって容赦しない。女性が弱々しくこわれやすいものだというのはうそで、「戦場に出て以来、死を齎す鉛や鉄や鋼をひきつける磁石が宿っているのは、ずっとずっとこわれやすい男性の身体の中だ、ということを知ったのである」(P.468) まちがいなく女性は男性より長く生きるのである。この考は小説の中で再びくり返され、死んでゆく Geneviève の言葉として見出される。「Kleist さん(Siegfried のこと)、あなたの出会った最初のフランス女が、わけもなくこんな風に死ぬところを見るなんて、ほんとについていませんわね。でもフランスで女性はとても強いことを保証しますわ。未亡人はフランスでは、やもめさんよりずっとずっと多いのですもの」(P.528) だが作者は Geneviève という女性をこのつよさから除外している。「私はいつも Geneviève だけは女性の中で唯1人、私より先に死ぬ人だという感じがしていた。だから私が彼女をどんな風に迎えたかおわかりだろう」(P.477)「昔、私の女性に対する怖れは、彼女たちが貴重で、すぐなくなってしまうと信じていたことから来ていた。…… 最初一寸ふれるのも、それから手でさわり、それからしめつけるのに私があんなに怖れた、わが青春の女友だちの中、誰もまだ呼んで答えないものはない」(P.469) 作者はこの強さから Geneviève を除外した。彼女は青年時代の「私」の夢のように、こわれやすい女性なのである。小さく、もろく、だが軽やかに事物の本当の姿を見ることのできる女性。— Marie Jeanne Dury 女史は、*L'Univers de Giraudoux*⁽¹³⁾ の中で次の様に述べている。「Giraudoux の本の中で娘たちは軽やかさそのものであり、男たちは宇宙の重さそのものである」(P.13)「彼女たちは木々が人間の友だちであることを知っており、生きものの1つ1つ、事物の1つ1つの傍に、それを理解できるものにする鍵のように居る」(P.11)「彼女たちは生命と全的な契約を結んでいて、もっともつまらないものの中にも生命を慈しむのだ」(P.16) 小説から劇がつくられた時、Geneviève が形どられたのは、この女性の観念であった。習作の断片でも、決定稿の劇 *Siegfried* でも、彼女は誰かが連れてこなければ、フランスを一步も離れないような女性である。断片の1幕1場⁽¹⁴⁾では彼女は「Paris 以外 Mont Saint Michel と Vezeley しか行ったことがない」と話している。劇 *Siegfried* では、G—「怖いわ Robineau」R—「怖いって何が？」G—「こゝにすることが…… 昨夜は一晚申特急車の中であんたの云う通りついて来たことを後悔していたの」(I-5) だがこの弱々しい女性は、苦しんでいる人間に真直共感できる感覚を持っている。彼女は祖国を失って苦しんでいる Siegfried に云う。G—「そしてあなたは、この見知らぬ顔の中に何もごらんになりません」S—「青白さが、何か後光のようなものが、多分大きな憐れみが見えます」G—「あゝ、運命が秘密を1人の女に託したのがいけないのですわ。私はもう黙ってられません。どんなことでも起るがいい。私が言葉の効果を少しもあやつれないのを恨まないで下さい。…… 私は全部一度に云います。これなんです。あなたはフランス人よ。あなたは私の許婚者よ。Jacques, それはあなたよ」(III-5) 政治的配慮も、相手のショックを怖れる理性も無駄である。彼女は大きな憐れみの感情で相手の苦悩をわけ合い、凡てを

放棄してしまう。だがこうして人間の心にまっすぐ入りこんでゆける女性は、また一切の人工的な不自然なものを否定して、宇宙の本質的なあり方を感じとることができる。2つの国の間で迷い悩む Siegfried に向って Geneviève は云う。「人類の半分は苦しまないで名も国も変えることができますわ。少くとも半分、女性全部が」この台詞は、S.V.K. にも Siegfried にも共通して存在している重要な台詞である。女性は祖国も同胞もすべてを棄てることができる。そしてそれは愛のためである。こゝで Geneviève の第3の特色、femme amoureuse という要素を分析することになる。

3) Femme amoureuse

Zelten の恋人という、小説での設定から、Siegfried のもとの恋人という劇での役割に、Geneviève がおきかえられた時、Siegfried にその過去を斉す「運命の人」(S. V. K. I-6, Siegfried I-6 Zelten の台詞)の役割が彼女に与えられただけではない。もっと重い愛の問題が彼女に負わされたのである。Geneviève の、愛する女という形象は、段階を追って劇の完成が進むにつれて、一般に愛する女というイメージから、1人の人間を愛する女というイメージへと凝集されてゆく。断片ではまだ詳しく描かれていた Robineau との洒落な友情を省略したことによって、S.V.K. では Forestier の恋人という位置が1そう強まったし、Siegfried では、Forestier 以外、何の興味もこの世にないという言葉によって、一そうその愛は抒情的になったといえる。このことを強調するために、S.V.K. で作者は、Siegfried の口をとおして美しい描写を見出している。S-「私は貴女に再び会ったのです。さっきは貴女の上に見なかったものを見ているのです。微笑んで悲しみを消そうとしているこの悲しげな唇。牡羊に向う牡羊のように光に向ってたゞかっているこの一寸つき出た額……(彼女を見つめながら)……そうだ、光は今まで一度も世界中でこんな互角の敵を見出したことはない。世界中の光全部が、恰度貴女と同じ重さで釣合っている」(II-7) 光の重さについてのやゝ難しい台詞は Siegfried では略されて簡単になっているが、その他の部分はそのまま、悲しみの陰を一身に集めたこの女性に Siegfried が魅きつけられてゆくさまをよく示している。Siegfried は、自分がフランス人であることも、Geneviève の恋人であったことも知らないまゝカナダ人だと名乗ってフランス語の個人教授に來た Geneviève を愛するようになる。Geneviève は、彼が Jacques であるという言葉を抑え、Siegfried が自ら記憶を回復するのを待つ。それはまたドイツの指導者である Siegfried をそのまま認め、その運命を見守ることでもある。次の場面は、S. V. K. で初めて創造されたものだが重要な意味をもっている。Napoléon が Louis de Bavière にフランス語を教えた日付についての会話である。G-「いゝえ、正確には1805年6月7日ですわ」S-「すごい知識ですね」G-「前から知っていたんじゃないんですのよ。一昨日からのことですの。あなたにお会いしてから私はこの国を知りたいと思うようになったのです。この国の歴史、この国の生活を――フランス語の授業と交換に、ドイツ語の、ドイツの授業をして頂こうと思っていたんですの。私はこゝにずっといることにしました。小さなドイツの少女をモデルにして、あなたの国の彫刻家

と一緒に勉強したり — そして私の訪問を喜こんで下さるのだったら、屡々あなたにお目にかゝって—。何ヶ月か後には、出来たらドイツ語であなたにお話したいと—」(Ⅲ-7) この場面は決定稿では、 —「何て素晴らしい市庁でしょう！ 1574年に建てられたんですわね。1575年にできた塔より何て古く見えるんでしょう」 —「すごい知識ですね」 —「仕入れたばかりの知識ですわ」と変っているがを残りの部分は、少しも変えられていない。⁽¹⁵⁾

Geneviève はだから必ずしも Siegfried の記憶を戻しフランスへ連れ帰ろうとしていたのではないのである。人間が、或る 1 人の人間を愛したら、そして愛するということが、この世界でたゞ 1 人の人間を他の人間から区別しその人のすべてを理解しようとするものであるなら、その人の国、その国の歴史、その国の生活を知りたいと希うのは自然なことである。その人が国に深く結びつけられているなら、自分もその国に止まろうとするのは自然なことである。Paris 以外ほとんど何処にも行ったことがなく、「おゝ！ Geneviève、君はそんなにまでドイツを知らないのか！ それじゃ 40 人の留学生を除く他のフランス人と全く同じだね」(断片 I-1 Robineau の台詞)と云われた Geneviève が、市庁の建立年代まで正確に覚えるほど別の国に興味をもったのは、愛する人の生きている国だからである。逆に云うと、人はある国の 1 人の人間を愛することによってはじめてその国と結ばれる。その国の歴史、建物、習慣のすべてが自分のものになる。このように眺める時、国籍の別とは一体何だろうか。人間同志が、下らない国の利害関係や法律や習慣のかゝわらない深さで愛し合うことによってしか、国と国との反目は解決され得ないのではないか。2 つの国の反目という大問題を個人の問題として受けとめ解決しようとした作品の意図がこゝに結晶しているとみてよいのではないだろうか。Geneviève を、このような深さで愛し得る人間に形づくることによって、劇は 1 つの大きな問題提起とその答を提示する結果になったと云うことができるだろう。次にこの愛は、同国人であるということや、過去の経歴に支えられるものではなく、互に互を知ろうとする現在と未来に存在している。Siegfried von Kleist で Siegfried が Eva を詰問して自ら Jacques Forestier だと知った後で Geneviève に云う台詞でそれが明らかにされている。 —「どうして君は昨日よりも僕からずっと遠くに行ってしまったのだろう。昨日は愛が、このドイツ人をこのフランス娘の方へ導いていた。…… 君のすべてが僕のつけられないほどの贈りもので、思いがけない恩恵だった。宿での出会い、君の訪問、それこそ僕の本当の思い出、唯一つの思い出だった。…… 今君が話してくれる共に送った生活は僕にはつかまえられる。君が僕にそのことを話してくれても、すべては死んだまゝなのだ」(Ⅲ-7) この場面は決定稿ではすっかり省かれ、Geneviève の口から Siegfried の前身が明かされると、すぐ Eva が入ってきて、Siegfried を間に、2 人の女性の対決の場につづく。恐らく愛のこの微妙な変化は、劇の中にもりこむには余りに複雑にすぎ、印象を弱めると考えられたのだろう。だが新しい愛にこそ希望があるということ、Siegfried と Geneviève の希望と共に、ドイツとフランスの希望があるということ、このことは、決定稿のすっかり書きかえられた第 4 幕で、十分に表現され、強い調べを奏でている。そしてこのことが劇の終りを飾ったということ

は、Geneviève の愛が終幕の大きなテーマになり、結論にさえたということである。

今まで見てきたさまざまな改作が、たゞ1つこの方向をさし示していたことに、今やわれわれは気づかざるを得ないが、事実上、*Siegfried von Kleist* の第4幕をなしている *Fin de Siegfried* と、決定稿 *Siegfried* の第4幕とを比較することによって、これからこのことを証明して結論としよう。

第 3 章

Fin de Siegfried 全体は、全く *Siegfried* の記憶の蘇りと、彼の死に捧げられていると云ってよい。(そして Geneviève に支えられながら死を前にして述べる *Siegfried* の言葉は、小説で Geneviève が死の床で述べる言葉と少し似ている)。ミュンヘンの近く、Nymphenbourg の城の中に昨日から *Siegfried* が身をかくしにきている。彼は自分がフランス人であると知っていたが、まだ記憶は戻らず、ドイツとフランス両大国の間の中立的な王国に身をよせようと考えている。幕があくと秘かに *Siegfried* 暗殺の命が伝えられ、1人の男が公園にかくれる(S.1)。城の中では城主の Saxe Altdorf 公が Robineau から事情をきかされている(S.2)。公は別れを告げに来た *Siegfried* に向って、ドイツとフランスの両国民が本当に知り合うことこそ世界の重要問題であると説き、フランスに帰ったらそれに協力してくれるよう要請する。が *Siegfried* はまだ自分自身さえ見出せないと嘆く(S.3)。現われた Geneviève にもその悲しみを訴えた後 *Siegfried* は公園に出かけてゆく(S.4)。やがて頭に傷を受けて運びこまれる *Siegfried*。彼はこのショックで記憶を回復し、傍にいる人々にこまやかな贈りものをして Geneviève の腕の中に死んでゆく(S.6)。簡単にしか述べられなかったが、こゝでは *Siegfried* が幕全体をおい Geneviève はほんの傍役に止まっているといわねばならない。この終を中心に、*Siegfried von Kleist* を見なおすと、成程 Geneviève は Zelten の恋人から *Siegfried* の恋人には変ったし、*Sigfried* にフランス語を教えるという「私」の代りをつとめて、どんどん重要な意味を与えられてはいるが、*Siegfried* の身を案ずる場面は Eva に、その祖国と名を知らせるのも Eva に留保されており、小説で死んでゆく唯一の人物だった Geneviève の役割も、*Siegfried* に移ってしまっている。決定稿の第4幕で、*Siegfried* が記憶をとり戻すことも、暗殺されることも変更し、Saxe Altdorf 公の台詞だったドイツとフランスを共に担った人物としての *Siegfried* の未来を暗示する役割も Geneviève に与えることによって、それまでに Geneviève の受けてきた1つ1つの変化が光を浴び、大きな意味をもつことになったのである。Evaの愛の描写を極度に制限して、*Siegfried* に本名を明かす役割も Geneviève に委ねたこと、これはとりも直さず Genevièveの愛が中心に強調されるという結果を目指すことだった。Geneviève の愛とは先に見たように、フランスの女が、唯一人の人物を愛することによって、その人に結びつけられた異国に心ひかれ、その国を愛しようとするることなのだから、それはフランス人が本当にドイツを知ろうとすることであり、それはSaxe Altdorf 公の云うように、世界で最も重要なドイツとフランスの問題なのである。決定稿 *Siegfried* の第4幕は、すべてこういう意図をもって描かれたように私には思われる。

舞台は、フランスとドイツ国境の小さな税関の駅。凡ゆる点で対照的な2つの風景が真中の目に見えぬ線を堺に展開している。まだ夜が明けない。Siegfried に先廻りしてここについた Geneviève と税関吏の場。Siegfried をひきとめようとやって来た2人の将軍の場の後、秘かにフランスへ旅立とうとして Siegfried が到着する。決心を変えないなら、ドイツ人 Siegfried は死んだことにしてほしいと云う2将軍に向って彼は、「最も相反する美德と悪徳さえ共存している人間の魂の中に、ただドイツという語とフランスという語が並ぶことを拒むのはひどすぎる。私は自分自身の内部に塹壕を掘ることは自分に拒否します。私がフランスに帰るのは、ドイツの牢屋が釈放する最後の捕虜としてではない。新しい知識の新しい心の最初の相続人としてなのだ。さようなら、あなた方の汽車はもう出る。Siegfried と Forestier があなた方にさようならを云います。」と別れの言葉をのべる(S.3)。彼は Geneviève を見出しておどろくが、彼女は1昨日来 Siegfried から目を離さず、Siegfried がドイツの夜に別れを告げていたのを、案じながら見ていたのだと語る。Siegfried は彼女から過去の自分の話をきく。Geneviève は Forestier の記憶が戻るのを予感する。そしてなお彼女は Siegfried と出会ってからの3日間の思い出を語る。「過去ですって！私たち2人のためには、もうそれを探さないで！私たちは新しい過去を持っているのではないの。それはたった3日にすぎないわ。…この3日間の過去が私にとっては、もう10年もの過去を消してくれたのよ。」汽笛がなる。早くいこうと云う Siegfried に対して、Geneviève は、国境のこちら側で云いたいことがあると彼をひきとめる。彼女は今まで1度もドイツ名で彼を呼んだことがなかったことを述べ、「Siegfried、あなたを愛している。」と告げる。これが Geneviève の最後の台詞であり、この劇の最終の台詞である。

以上のように、くり返しかきえられた変化の辿って来た道は、劇化への、集中化への道であったが、それによって Geneviève という1人の小さな女がフランスを代表する存在となってゆき、「私」でなく女性がその重い役を担ったことによって、彼女の愛が、フランスとドイツという大きな問題にかかわりをもつことになった。人工的な法律や偏見をこえて、自然の大地に立って生きる時、そこに生まれる人間同志のつながりこそ、この世界でもっとも大切なものだというテーマに支えられて、Geneviève が小説でのイメージを失わないまま、殆んど主役といっている役割を果すようになる経過をわれわれは見たのである。フランスとドイツの国の利害という抽象的な問題を、この劇は個人の問題に還元したことによって、具体的、人間的真實にひきもどしたと云えるだろう。Giraudoux 劇の女性が、固くてゆがんだ人の世の掟をこえて、自然な真實の生命に語りかける役を与えられていることは、よく云われるが、この作品もまたそうした女性を中心にひきよせながら、劇を形づくってゆく過程を辿ったと云えるだろう。

註

- (1) (2) (3) J. Robichez: *Le Théâtre de Giraudoux*, P.12
- (4) R-M. Albérès: *Esthétique et morale chez Jean Giraudoux*, P.256-260
- (5) (6) J. Robichez, op. cit. p.15-20
- (7) R-M. Albérès: *La Genèse du«Siegfried» de Giraudoux*, 1963, *Siegfried et le Limousin et Siegfried* (in *Revue des lettres modernes*, 1961, p.264-278. どちらの論文でも、Albérès氏はGenevièveの内容に言及していない。
- (8) 資料として用いたtextesは*Théâtre complet*, Neuchâtel et Paris, Ides et Calendes, 16 vol, in-8°, 1945-1953, tome I, *Siegfried*, suivi de *Fugues sur Siegfried et Fin de Siegfried*, tome XII, *Variations* 1, *Siegfried von Kleist*, adaptation dramatique en quatre actes de *Siegfried et le Limousin*. 劇Siegfriedの最初の完全なmanuscriptである。Fragments inédits de *Siegfried*＝断片は全部で20あり、I-1, I-1, I-4, I-5, I-6, I-4, I-2, I-2, II-3, II-4, II-2, III-1, III-2, IV-1, IV-2, IV-1, IV-1, IV-1, IV-2の順で並んでいる。大体書かれた順であるという説明がある。
小説はJean Giraudoux, *Oeuvre romanesque*, t.I, Grasset 1955
- (9) I, p.139→Lamento, p.161-166.
- (10) *Ibid*, t. XII, p.193-198
- (11) Jean Giraudoux: *Racine*, Grasset, 1930
- (12) *Théâtre complet*, XII, p.145-152, Fragments inédits 1.
- (13) M-J Durry: *L'Univers de Giraudoux*, Nizet, 1975, なお、C-E, Magnyは、Evaをドイツの伝説のブリュンヒルデにたとえ、Giraudouxの作品では、肯定されないVierges guerrièresだとしている。
(*Précieux Giraudoux*, p. 93-4.)
- (14) *Théâtre Complet*, XII, p.146
- (15) 《j'ai désiré connaître ce pays, son histoire, sa vie》の後に決定稿 *Siegfried* では Cette ville とつけ加わっている。